



鯛縛網 (香川県直島) スケッチ: Y・N (二〇一二年)

## ニッチの出口—研究所の向こうのノスタルジックな発見についての手紙

シンシア・ネリ・ザヤス

昔の一年は早く終わっていきます。私は研究を整理し始めています。このスケッチがフィールドノートに隠されているのを見つけました。あなたは文章と私のフィールドノートからそれが何か理解するのを手伝ってくれましたね、覚えていますか。タイシバリアミ(鯛縛網)という伝統漁法です。二そのの小舟にご注意ください。

何十年も昔、直島の海辺では女性の人形使いがこの小舟を舞台にして演じていました。直島女文楽は今では世界クラスの舞台設備をもった新しい場所で演じられます。私は感銘を受けましたが、もしこの古い舟の触先を使って岸辺で演じていたなら、もっと本物の感を得たとは思えませんか。

世界的に知られたベネッセ・ハウス・ミュージアム、アートハウス・プロジェクト、地中アート・ミュージアム

ムはどれも空にくっきりとシルエットを描いていて、昔の上演が行われていた岸边を見下ろしています。ベネッセコーポレーションは瀬戸内トリエンナーレのおかげでこの静かな島を現代アートのメッカに変え、世界の注目を集めています。きっとあなたもきいたことがあるでしょう。漁猟はもはや昔のように行われていません。

今でも海苔栽培、カレイの養殖などの漁業を営んでいる数軒を除いて、直島はこう言ってよければコスモポリタンの島です。草間彌生のぶよぶよしたアート作品がそれを象徴しています。彌生は元祖カワイイ・アーティストです。彼女の作品をお好きですか。カワイイが若者だけのアイデアとは思いません。それはすべての日本人の心にあります。

ところで細川周平先生に出くわしたら、研究者向けの宿舎、日文研ハウスでの滞在が直島調査をやり多くしてくれたと伝えておいてください。図書館は二〇一一年の研究に必要な宝物殿でした。

ニッチで外国人研究員として初めて滞在してから（二〇〇六年一〇月から二〇〇七年九月まで）一〇年になるうとしています。あなたに会って、私たちが愛着をこめてニッチと呼んだ場所についてずいぶん教えてもらいました。

あなたを通して私にとってニッチとはどんなところだったでしょうか。私にはニッチは修道院で作品を書きたいと夢見る学者のための隠遁の場所です。中世ヨーロッパの僧院のように学者たちはここではあまり口をきかずお互いに少し会釈するだけです。空間は思索に向かう小道によって結ばれています。コモンルームは学者がおしゃべりし事務を執る唯一の空間です。この静謐さの彼方に「グギの教え」というのがあり、構内の出口の向こうにある生活を発見しました。

私の中にニッチの優しい思い出を残した出会いについて話させてください。年が終わるごと

に懐かしさを感じます。公式の地図ではニッチには正門、北門、南門の三つの門があります。正門は主要な出入口のゲートで、すべての外国人学者は最初そこを通過してニッチに到着します。それはニッチに別れを告げるときに最後に通る門でもあります。

私にとって休みの時には北門があげているでしょう。そこから入ると守衛さんが入場者を待ちかまえて、研究室のカギを渡します。南門があくことはめったになかったけれど、ある春の日にはここを通り抜けました。あなたは桜に縁だられたぐねぐね道を桂坂保育園の下に通っているのを見せてくれ、ピンクの花びらがひらひら舞う下をぶらぶら歩いていきました。

他に二つの非公式の門があります。一つは構内の東側にあり日文研ハウスに一番近い門、もう一つはその西側と北側の仕切りがぶつかるところにある門です。

この二つの門からもっと興味の湧く出会いに導いてくれましたね。ある秋の日の昼食の後、赤おにレストランの背後にある出口に連れていってくれました。道を横切って小屋に通じる門をくぐりました。池がありすてきな堂々たる見かけと彩り豊かなアヒルが自由にカタツムリや水草を食べていました。野生なのか、それとも管理人のペットなのかと考えました。あまりにおとなしく私たちは近づいていきました。

頭上には赤、黄、緑のカエデの葉が紅葉の季節らしくありました。長く図書館で仕事をした後、一人で何度も何度もこのスポットに出かけました。この自然のポケットを紹介してくれてありがとう。

ハウスに近い出口は私の心に一番近い出口です。あたかも象徴的に若いころからの思い出のあるふるさとに私を連れ帰るかのようです。一九七七年、外国人学生として初めて日本を訪れたときには吹田の関西留学生宿舎で暮らしました。ある日、高槻市は宿舎のフィリピン人学生

をマニラ市高槻市姉妹都市祝賀会に招待してくれました。なぜ高槻とマニラなのでしょう。それは一七世紀に町の家臣だった高山ジュスト右近（一五五二年～一六一五年）が、キリシタン信仰を捨てなかったためマニラに追放されたからです。大家族すべてに下層の侍まで彼とその地まで同行しました。偶然ですが、二〇一七年二月七日、高山は大阪カテドラル聖マリア大聖堂で列福されます。この単語をご存知ですか。列福とはカトリック教会が死後、死者の天国入りを認められることです。その人物は「福音された誰それ」と呼ばれ、彼ないし彼女の名で祈る個人のために間に入ることができません。もし福音された高山が力なり奇蹟を起こされたなら、聖ウコン・ジュスト・タカヤマと列せられます。

一九七七年に初めて高槻を訪れたときには地方都市と思っていましたが、それ以上だったのです。

阪急駅の南口にはショウテンガイがあり、屋根がついた通りでいろいろな物やサービスの店が並んでいます。それは特別でした。なぜなら近くのハタケで採れた農作物がスーパーマーケットに運び出されるからです。地元産や海外の食べ物がありました。京都駅の店に比べると並べ方は洗練に足りませんでした。でも京野菜、淡路島の牛乳（神戸の近く）、チリのサケ、オーストラリアのビーフ、カナダのシシャモが桂のような「高級」地区のスーパーマーケットよりも二割から五割安く買えました。あふれる物のほかにショウテンガイと通りの庶民的な雰囲気を楽しみました。

駅の北口にはバー、レストラン、学校や宗教の建物、地元の役所関係がありました。高槻カトリック教会ではウコン・ジュスト・タカヤマの彫像の出迎えを受けます。数メートルいくと高槻城跡である公園があり、博物館兼図書館が高山一族の遺産を展示していました。日

曜のカトリック教会のミサと庶民的市場の光景には懐かしさを覚えます。特にミサの後のノミの市で服の安売りをしているのを見ると、家に帰ったかのようにでした。他にも一〇〇円肉餃子や古本屋で和辻哲郎の『風土』の初版本に出会ったときにもワクワク喜びました！

普通の道すじでニッチに帰るとハウスに一番近い門から入りました。暗くなっていると時には野生のシカの歓迎パーティーに迎えられることもありました。ニッチは森のある山へ向かう道に通じる丘にあるため、野生動物に出会うことは驚きではありませんでした。敷地を通り抜けていくのを見たことはありませんが。

ニッチの出口の向こうには冒険があります。特に客員研究者には。門の数々を見せてくれてどうもありがとう。さまざまなこと立ち向かう愛を共有できる日本の友たちと知り会えて楽しかったです。お元気で、お健やかに、来たる二〇一七年の酉年をお幸せにお過ごしください（英語だと year of rooster 雄鶏の年と呼んで hen 雌鶏の年と呼ばないのをフェミニストは変だと思わないのかしら、なんてダジャレ）。

（フィリピン国立大学国際研究センター教授）

原文…英語

翻訳…細川周平（国際日本文化研究センター教授）